



今年度もあと2か月を残すのみとなりました。振り返りますと今年度も、収束が見通せない新型コロナウイルスの流行下での教育活動を強いられました。学校では感染防止対策を工夫しながらの行事の実施やICTの活用など、ウィズコロナの状況下で日々教育活動に取り組んでおられることに心より敬意を表します。



さて、今年度末で退職される皆様、永年にわたり子どもたちの育成に貢献されましたことに心から感謝申し上げます。TNBだより2月号と3月号は、退職される皆様を代表して、丹波篠山市の学校2名、丹波市の学校2名の退職者から、永年携わってこられた教職への思いを伝えていただきます。

これまでの教職生活を振り返って

丹波篠山市立篠山小学校長 杉本 克治

昭和62年4月に正式採用として篠山市立村雲小学校に赴任して以来、今年3月で37年間の教職生活を終えることとなりました。その間、多くの子どもたち、保護者、教職員、地域の人々と出会い、教職員として大切にすべきことを数多く学びました。

その中で私が教職員として最も大切にすべきだと思うことは、子どもたちの安全を守り、命を守ることです。このことは当たり前ですが、子どもたちの命を守ることより大事なことはありません。1年生女兒が3階から転落し死亡するという痛ましい事故があった古市小学校で、私は事故後に教頭として3年間勤務しました。その間当時の校長先生の指導を受けながら、教職員の安全に対する意識の向上、きめ細かで組織的な安全点検の実施、子どもたちの安全教育の充実に、教頭として精一杯取り組みました。また、子どもたちの安全を守るため、保護者や地域の人々と連携した取組を進め、その大事さを実感しました。今後も各学校において子どもたちの安全を守り、命を守る取組の充実が図られることを切に願っています。

教職員として次に大事にすべきだと思うことは、日々の学校生活で子どもたちが、「授業がわかる、学習が楽しい」と感じられるようにすることです。このことは教諭時代も管理職になってからも変わりません。学校生活の中でその多くの時間は授業です。授業がわかり、学習が楽しいと感じると、子どもたちは日々明るく、前向きな気持ちで学校生活を送るようになります。そして友人関係も良好となり、生徒指導上の問題も少なくなります。そのためには、子どもたち一人一人の良さや課題を把握し、それを日々の授業の中で活かすことが必要です。また、個別の指導計画などにより、子どもたちの課題を的確につかむことも大切です。各学校で多くの子どもたちが日々「授業がわかる、学習が楽しい」と感じながら学校生活を送ることを願っています。

最後に、わたしたちは地域の人々に支えられながら、日々の児童生徒への教育を進めています。このことの大切さを37年間で強く感じています。各校で地域との繋がりを深め、地域と連携した取組の充実を期待しています。

教職生活を振り返って

丹波市立山南中学校長 荻野圭裕

大学を卒業し、地元である氷上郡(当時)での採用となり、教職生活をスタートさせました。その当時はまだ土曜も半日学校があるという状態でしたが、今ほど忙しいという感覚はなかったように思います。何も分からないまま日々の授業や教材研究、学級経営に部活動指導とがむしゃらに取り組んでいたように思います。

特に若い頃は行事などに熱中しました。素直に楽しかったです。また、同じように部活動にもはまってしまいました。最初の勤務校の事情で自身全く経験のなかった陸上競技部の顧問となりました。ところが結局、30年近く一度も他の部を持つことなく過すことになります。陸上競技では様々な種目があり、飽きっぽい私には合っていたのかもしれませんが。その間、生徒たちにいろいろな大会で様々な地へ連れて行ってもらいました。ある程度、年を重ねても本気で喜んだり悔しがったり、そんな熱くなれる経験を毎年のようにさせてもらえたことには感謝しかありません。

また、市島中学校に在職していたときに発生した丹波市の豪雨災害は自分自身にとっての一つの転機だったように思います。自力通学ができず、バス通学に変更するため地域を回って臨時のバス停を検討し、水没した教科書や文房具を手配するなど学校再開に向けて様々な苦労がありました。しかし、苦難を乗り越えて通学してくる子どもたちの明るさに救われました。その直後に実施した体育大会は今でも強く印象に残っています。

その後、管理職となり一番感じたことは人を育てることの大切さであり、難しさです。「人は石垣、人は城」とは、まさにその通りだと実感しました。今、学校を取り巻く環境が大きく変化する中、価値観も多様化し、要望も多岐にわたります。それに対応するため、今後の学校は組織として全員が成長していく「学習する学校」となることが必要であり、そうなることを願います。

最後になりましたが、今までお世話になったすべての方々に感謝申し上げます。ありがとうございました。

来年度に向けて

通常学級に通う公立小中学校の児童生徒の8.8%に発達障害の可能性があることが12月に文部科学省から発表され、マスコミでも大きく取り上げられました。10年前の前回調査から2.3ポイント上昇し、35人学級なら1クラスに約3人が読み書き計算や対人関係などに困難があるとみられます。

文科省は「保護者や教員の間で発達障害への理解が深まり、以前は『落ち着きがない子』と見過ごしてきたようなケースを認知できるようになった」と分析しています。

さて、学校では本年度の教育活動を省み、来年度の教育活動を検討されている頃だと思います。特別な支援を要する児童生徒も含め、再度子どもたちの実態分析をし、つきたい力やめざす子ども像を明確にして研究や授業づくりの方向性を検討していきましょう。

